

文化庁委託事業 令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業
障害当事者の劇場・文化施設での芸術鑑賞及び
体験を充実させる施設職員とアーティストの育成プログラム

障害のある人と考える 舞台芸術表現と 鑑賞のための講座

報告書

もくじ

02 本講座について

04 入門編

- 04 オンライン講座
 - 07 上映会
 - 09 企画運営者座談会(黄木多美子×星茉莉×兵藤茉衣)
——入門編で企画運営者として大切にすることは？
 - 10 劇場担当者対談(荻原宏紀×木澤美恵子×小倉由佳子)
——地域みんなできりくむアクセシビリティ。
公共・劇場にできること、やっていくべきこと
-

13 企画実践編

- 13 プログラムの流れ
 - 14 施策研修① 川口太陽の家/工房集(埼玉県)
 - 16 施策研修② たんぼの家/アートセンターHANA(埼玉県)
 - 18 視察研修③ 生活介護事業所「ぬか つくるとこ」(岡山県)
 - 20 視察研修④ NPO法人リベルテ(長野県)
 - 22 企画検討会
 - 23 フィードバックコメント
 - 24 受講生対談(今野はるか×児島美穂×浜田誠太郎×千田ひなた)
——背景や職域の違う人同士で、“劇場”の課題に向き合った半年間。
これからの活動にどのように生かせるか？
 - 28 監修/メンターのコメント
-

31 まとめ「気づきと学び」

文化庁委託事業 令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業
障害当事者の劇場・文化施設での芸術鑑賞及び
体験を充実させる施設職員とアーティストの育成プログラム

障害のある人と考える

舞台芸術表現と鑑賞のための講座

報告書

本講座について

対象 | 劇場や文化施設の職員、アーティストなど全国各地の若手からシニアまで経験問わず受講可能。社会と舞台芸術のつながりを探している方

劇場や美術館、博物館などの文化施設で働く人、アートに関わるつくり手、福祉施設で働く人。それぞれが現場を視察し、さまざまな分野の参加者同士で刺激しあい、共に考え、学び合うことを通じて、自分の現場にもちかえって、アクションを起こすことができるようになるまでの過程をサポートする約半年間の講座として実施しました。

講座と上映会を通じ、障害当事者との創作現場に必要な視点や考え方を学ぶ「入門編」と、実際に障害当事者との文化芸術活動に取り組む全国の福祉施設の視察と、受講生自ら企画を立てるグループワークからなる「企画実践編」に分かれています。

入門編

オンライン講座

全6回のオンライン講座で、障害のあるひとと芸術文化の場をひらいていくための視点を学びます。

テーマ一覧 |

第1回

「芸術文化の価値とは何か」

第2回

「舞台芸術系ワークショップの福祉施設での実践」

第3回

「合理的配慮から考える障害の社会モデル」

第4回

「障害当事者の視点からいまの創造環境についてきく」

第5回

「舞台芸術における音声ガイドについて」

第6回

「障害当事者との企画を考えるということ」

上映会

障害当事者の創作活動の現場で起こる実態とその創作環境、周囲の関わり方、障害当事者の表現にかける思いについて、ドキュメンタリー映画の鑑賞を通じて学びます。

実施会場一覧 |

新潟

りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館 スタジオA

福岡

福岡市美術館 ミュージアム ホール

福島

いわき芸術文化交流館アリオス 小劇場

東京

東京芸術劇場 シアター・イースト

京都

ロームシアター 京都 ノースホール

企画実践編

視察研修

障害のある方たちの表現活動の現場(福祉施設)を見学し、その活動を支える職員の方々から直接お話を聞くことで、企画実践の上で、必要な心構えや知恵を得ることを目指します。

視察施設一覧 |

「現場の声を聞く」

川口太陽の家 工房集 (埼玉県)

「実践するPLAYの時間」

たんぼぼの家 アートセンター-HANA (奈良県)

「なんでそなんプロジェクトからぬかが目指すカタチ」

ぬかつくるとこ (岡山県)

「まちの中の施設」

リベルテ (長野県)

企画立案 グループワーク

実際に自分たちの活動領域で実践できる企画(ワークショップや創作活動、鑑賞プログラム等)を立案、実施できるまで考え発表します。

企画監修 | 長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)
文(NPO法人DANCE BOX 事務局長)

メンター | 山川陸(アーティスト)

● 企画検討会(オンライン)

受講生内で4人1組を目安としたグループ分けを行い企画を立案していきます。メンターへの相談やフィードバックを得ながら企画をまとめていきます。

● 上映会振り返りディスカッション(オンライン)

● 企画発表会

会場 | ロームシアター 京都 ノースホール



入門編

講座と 上映会

オンライン講座と上映会を通じ、障害当事者との創作現場に必要な視点や考えなどを学ぶ基礎講座を開催。

オンライン講座では、「障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞」という本講座のテーマの基礎となるような考え方、言葉について、専門家、舞台の制作・企画者、福祉の現場の実践者のレクチャーを通じて学びました。また、全国5都市で開催された上映会では、障害当事者の創作活動の現場で起こる実態とその創作環境、周囲の関わり方、障害当事者の表現にかける思いについて、ドキュメンタリー映画の鑑賞を通じて考えました。

劇場関係者、研究者、アーティスト、行政関係者、大学生。 アートと福祉の実践者がともに学ぶオンライン講座

第1回 芸術文化の価値とは何か

—— はじまりは、個人のワクワクから。芸術と文化は、木と土の関係

障害当事者との創作現場に必要な視点や考え方を学ぶ本講座では、当事者との企画や創作を考えるにあたり、参加者ひとりひとりが、社会における芸術文化の価値について改めて見つけようとする会となりました。

歴史的、学術的背景や事例もまじえた講義の中で、「文化的価値とは?」「目に見える作品と目に見えないプロセスそれぞれをまなざすことの違いは?」「社会包摂とは?」「そもそもウェルビー

ングはなぜ必要?」など重要で根本的な問いが提示されます。「インクルーシブな社会の実現には、いろんな人が混ざり合っていて何か一つのものでできるんじゃないくて、あちこちにローカルでいくつかのコミュニティができていくことがすごく重要。それらが重なり、繋がっていくことによって、社会全体としてインクルーシブになる。芸術文化は非常にポテンシャルがある」と中村先生。一人称の「楽しい!」から、場をデザインすることの大切さを学びました。

中村 美亜

専門は文化政策・アートマネジメント研究。近年は芸術文化の価値と評価、社会包摂、認知症の人との共創的アートに関する実践的研究を行っている

日程 | 2023年9月13日[水] 19:30-21:00

講師 | 中村 美亜 (九州大学大学院芸術工学研究院・教授)

第2回 舞台芸術系ワークショップの福祉施設での実践

—— パフォーミングアーツと福祉の出会いが、差異を楽しむ感覚を育む

生活介護事業所「カブカブ」所長・演劇ライターの鈴木励滋さん、振付家・演出家・ダンサーの白神ももこさんをお招きして、舞台芸術系ワークショップの可能性や場づくりについてお話いただきました。

「差異は個人にあるが、障害は関係から生まれる」と鈴木さん。「しんどさ、マイノリティ性は誰でも体験していることなので、実は、誰もが自分ごととして、障害について考えられるはず」と投げかけます。福祉施設でワークショップを実施してみることの価値について、「施設のスタッフが、アーティストの物の見方から学び、差異を楽しむ感覚を磨ききっかけになること」や「参加した人たちが

自分を肯定できるようになることで、否定されない安心が場を満たしていくようになること」を挙げました。

白神さんは、芸術監督を務める公共ホール「キラリふじみ」の活動において、「私の役割は、普段劇場に来づらい人たちとパフォーミングアーツとの出会いの場を作り、劇場とアーティスト、劇場と市民を繋げること」「今、ここにいる人と時間と場所を共有して、遊びを発見することが大切」とお話ししてくださいました。後半の対談も含め、参加者にとって、実践的な視点を学ばせていただきました。

白神 ももこ

ダンス・パフォーマンスのグループ「モモンガ・コンプレックス」主宰。無意味・無駄を積極的に取り入れユニークな空間を醸し出す作風には定評がある。富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ芸術監督

日程 | 2023年10月11日[水] 19:30-21:00

講師 | 鈴木 励滋 (生活介護事業所「カブカブ」所長／演劇ライター)、白神 ももこ (振付家／演出家／ダンサー)

鈴木 励滋

1973年3月群馬県高崎市生まれ。97年から現職を務め、演劇に関しては劇団ハイバイのツアーパンフレットや「東京芸術祭」のウェブサイトなどに寄稿。

入門編講座では、専門家、実践者によるオンラインのレクチャーが開催されました。

これから福祉とアートの現場で活動したい方たちにぜひご覧いただきたい6つのテーマが設定されており、手話通訳、日本語字幕付で配信された本講座は、100名近くの方が受講。各回、講義後には企画実践編受講生を対象に意見交換、質疑の場も設けられました。

第3回 合理的配慮から考える障害の社会モデル

—— マイノリティの視点を通して、私たちの社会の偏りとバリアに気づく

令和6年4月から民間事業者による障害のある方への合理的配慮が義務付けられることになり、芸術業界でも「バリアフリー化」が目指されています。第3回は、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター特任准教授の飯野由里子さんの講義を通じて、「社会的障壁」について考え「合理的配慮」について学びました。

「合理的配慮」についてその基礎として理解しておくべき、「社会的障壁」「障害の社会モデル」について、成立の歴史

的、法律的背景も踏まえながら講義が進みます。「そもそも多数派に合わせて社会を設計していることに問題がある」「社会の中でマイノリティの立場に置かれている人たちと対話することで、その人たちが見ている社会の歪みや偏りを知ることも大切」と飯野先生。

ノウハウや正解があるわけではない。まずは対話し、調整をしていくという基本姿勢を持ち、実践していくことの大切さを実感する講座でした。

日程 | 2023年10月23日[月] 19:30-21:00

講師 | 飯野 由里子 (東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター特任准教授)

飯野 由里子

専門はジェンダー、セクシュアリティ、ディスアビリティ理論。ジェンダーと多様性をつなぐフェミニズム自主ゼミナール(ふゑみ・ゼミ)運営委員。OTD(組織変革のためのダイバーシティ)普及協会運営委員。

第4回 座談会 障害当事者の視点からいまの創造環境についてきく

—— 障害当事者の視点からいまの創造環境についてきく 正解はない。人と人が関わり、共にものづくりをしていくこと

文化芸術の場づくりに関わる4名の座談会。ろう者でパフォーマーの南雲麻衣さん、視覚障害当事者で俳優の関場理生さん、筋ジストロフィーによる電動車いすユーザーで映画監督の石田智哉さん、視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップを運営される林建太さんから、ご自身の活動についてご紹介いただいた後は、対話形式で進行。

「障害当事者のアーティストとして現場に参加する際、サポー

トしてもらう仕組みをどのようにつくる?」「マニュアル化できない部分、介助者をお願いしづらい部分についてはどうする?」「迷惑をかけてしまう、ということについてどのように捉える?」「支援者、介助者との仕事の中での距離感についてどう考えている?」など“障害のある人の創作環境”について考えるきっかけとなる重要な問いについて話されました。

日 程 | 2023年10月30日[月] 19:30-21:00

登壇者 | 石田 智哉 (映画監督)、関場 理生 (俳優／劇作家／ダイアログ・イン・ザ・ダークアテンド)、南雲 麻衣 (パフォーマー／アーティスト)、林 建太 (視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ)

石田 智哉

1997年生まれ。立教大学現代心理学部映像身体学科卒業、同大学院修士課程在学中。しょうがい者が創作をする過程で生まれる、身体観やしょうがい観の変化について研究する。

南雲 麻衣

文化施設の運営・企画の仕事の傍ら、アーティストとしても活動。当事者自身を持つ身体感覚(ろう[聾]する身体)を「媒体」に、各分野のアーティストと共に作品を生み出す。

関場 理生

1996年、東京生まれ。2歳で失明し全盲となる。東京都立総合芸術高等学校舞台表現科3期、日本大学芸術学部演劇学科創作コース卒業。みみよみナレーション事務所に所属

林 建太

2012年より全国の美術館や学校で、目の見える人、見えない人が言葉を介して「みること」を考える鑑賞プログラムを企画運営する

第5回 舞台芸術における音声ガイドについて

——作品を届けるための技術と情熱。奥深い、鑑賞サポートの世界

長年音声ガイド作りに携わり、演劇家でもある鯨さん。講義の前半、演劇作品の一部を用いて、音声ガイドを実演してくださいました。「私が大切にしたいと思ってることは作品の世界観を壊さないこと。」舞台上で同時にさまざまなことが進行していく中で、情報の取捨選択が音声ガイドづくりのポイントになっていきます。また、鯨さんは、関わる公演の情報提供、チケット購入、開演

前の作品事前解説、当日の受付体制や観劇環境へのアドバイスなど、音声ガイド以外の鑑賞サポートについても丁寧にお話しくださいました。「こういう鑑賞サポートをやるんだっていうことを、スタッフ全員の方に把握していただくことが非常に大事です。」鑑賞サポート全体を考えていく上でも、学びの多い講義でした。

日程 | 2023年11月28日[火] 19:30-21:00

講師 | 鯨 エマ(演劇家/NPO法人シニア演劇ネットワーク理事長/舞台ナビLAMP代表/だれでもアーティストわくわく代表)

鯨 エマ

シニア劇団かんじゅく座の作演出、全国シニア演劇大会の総合プロデュース、鑑賞サポートの人材育成、奥多摩町を拠点とした演劇活動を行う。

第6回 障害当事者との企画を考えるということ

——まずは、互いに尊重し、知り、共につくろうという姿勢から

映画作家、アーティストであり、一般社団法人 日本ろう芸術協会 代表理事でもある牧原依里さんから、ろうや難聴の方達とともに、あるいはろうや難聴の方達に向けた企画をする上で、知っておくべきことを中心にお話しくださいました。

そもそも、ろうや難聴の定義自体が人によっても、時代によっても、認識が異なるものであること。日本手話は、日本語とは異

なる言語であり、異なる文化を持つこと。手話は使用が禁止された時代もあったこと。手話の歴史的な背景や言語的な特徴についても踏まえた講義の中では、「聴覚障害といってもさまざまな人がいる。決めつけずに、互いを知ること」「尊重しあいながら、ともに考えていくこと」が大切であることが強調されました。

日程 | 2023年12月5日[火] 19:30-21:00

講師 | 牧原 依里(映画作家/アーティスト/一般社団法人 日本ろう芸術協会 代表理事)



牧原 依里

1986年生まれ、ろう者。ろう者の「音楽」をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』(2016)を準境(DAKEI)と共同監督、第20回文化庁メディア芸術祭 アート部門 審査員推薦作品、第71回毎日映画コンクールドキュメンタリー映画賞ノミネート等。

本講座の目標

1. 芸術文化にはどんな価値があるかを理解する
2. 芸術文化活動からどんな変化がどのように起きるかを説明できるようになる
3. 芸術文化がひらくダイバーシティ&インクルージョン、ウェルビーイングの可能性を展望できるようにする

今回の講座で芸術文化っていうのは非常に広い範囲を含んでいます

◀第1回オンライン講座の様子。

上映会 新潟 1月20日(土)/福岡 1月27日(土)/福島 2月3日(土)/東京 2月10日(土)/京都 2月17日(土)

“表現”の可能性を追求する話題作3本を全国5都市にて上映!

障害当事者の創作活動の現場で起こる実態とその創作環境、周囲の関わり方、障害当事者の表現にかける思いについて、ドキュメンタリー映画の鑑賞を通じて学ぶための上映会を開催。全会場で、監督やプロデューサーによるアフタートークを、文字支援、手話通訳ありで実施しました。

上映作品

こころの通訳者たち
What a Wonderful World
2021年/日本/94分



©Chupki

演劇や映画を視覚障害者に届けることに奮闘する通訳者たちを追った日本唯一のユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」製作のドキュメンタリー
公式WEB
<https://cocorono-movie.com>

音の行方
2022年/日本/107分



©映画「OTOASOBU」製作委員会

知的障害がある人と即興音楽の出会いが生み出す新たな世界。音遊びの会ドキュメンタリー
公式WEB
<https://www.whereabouts-of-sound.com>

へんしんっ!
2020年/日本/94分



©2020 Tomoya Ishida

電動車椅子を使って生活する石田智哉監督が障害者の表現活動の可能性を探るドキュメンタリー
公式WEB <https://henshin-film.jp>

新潟会場

『こころの通訳者たち』終映後、プロデューサー/CINEMA Chupki TABATA 代表 平塚 千穂子さんをお招きしてアフタートークを実施。本作品が生まれた背景やプロセスについてお話しくださいました。

「聞こえない人と見えない人、視覚世界と聴覚世界の違いがあっても、人が感情や心を捉えようとしている、その衝動、熱は変わらない。お互いに知りたい!という想いがあった」と平塚さん。「舞台手話という、日本手話とも異なる技術のある世界で、通訳者たちが悩み、つくっていくプロセスを伝えられたこともよかった」「映画に関わった見えない人、聞こえない人が、その後、互いの世界を知りたいと一緒に活動するようになった」と作品を通じて、広がっていた新たな世界についても話してくださいました。



日程 | 2024年1月20日[土]

会場 | りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館 スタジオA
※『こころの通訳者たち』終映後 アフタートーク実施

登壇 | 平塚 千穂子(プロデューサー/CINEMA Chupki TABATA 代表)

福岡会場

『音の行方』終映後、野田 亮監督によるアフタートークと音遊びの会のライブを実施。

トークでは、「今映画の中で使われている映像が撮れたのは半年経ってから。最初は、正直、何をどのように撮っていいかわからなかった。」と野田監督。通っているうちに、徐々にメンバーとの距離が近くなり、自分の目線で取れるようになった、と撮影の時のことを話してくださいました。

今回、バリアフリー字幕に加え、「視覚表現版」という独自の情報保障で上映されたことについて、「ろうの人たちに、そもそも、音楽がどう面白いかわからないと意見をもらって、音あそびの会の音楽の面白さを可視化してみたいと思い、音の感触、柔らかさや硬さなど、いろんな表現をどうにか視覚化してみようとして、実験的に、音の表現をグラフィカルに視覚化した」と、語られました。



日程 | 2024年1月27日[土]

会場 | 福岡市美術館 ミュージアム ホール
※『音の行方』終映後 アフタートーク実施

登壇 | 野田 亮(監督)、音遊びの会/富阪 友里、後藤 佑太

福島会場

『こころの通訳者たち』終映後、プロデューサー／CINEMA Chupki TABATA 代表 平塚 千穂子さん、本作にも登場し、音声ガイド作りに参加していたブラインドコミュニケーター 石井 健介さんをお招きしてアフタートークを実施。石井さんは、「手話という言葉、背景にある文化を理解し、リスペクトを忘れずに、どうすればいいかという対話を諦めなかったことが、今大きな財産になっている。」と話します。

鑑賞に訪れた演劇に取り組む高校生からは「音声ガイドを作るプロセスを初めて知って興味を持った」という感想も。平塚さんは「字幕や音声ガイドという存在が、いわゆる健常と呼ばれる人たちの映画鑑賞体験を豊かにしている。」「今日のような文化的なイベントに行っても、ほとんど障害のある人に出会わないけれど、一緒に鑑賞することが当たり前になっていくことで、街自体も変わっていく」と語りました。



日程 | 2024年2月3日[土]
会場 | いわき芸術文化交流館アリオス 小劇場
※『こころの通訳者たち』終映後 アフタートーク実施
登壇 | 平塚 千穂子 (プロデューサー/CINEMA Chupki TABATA代表)
石井 健介 (ブラインドコミュニケーター)

東京会場

『へんしんっ!』終映後、石田智哉監督と映画にも登場する振付家・ダンサーの砂連尾 理さんをお招きしてアフタートークを実施。映画の撮影を通じて、石田監督自身が身体表現にチャレンジしたことで「自分の身体を動かすことの面白さに触れた。身体の癖がふっと出てくることを面白がることができるようになった」と自身の変化についても話します。

障害のある人の身体を「違うコンテキストをもった身体」と表現する砂連尾さんは、「社会的な意味で、相互理解するために用いられる、視覚障害、聴覚障害、身体障害という分類が見えなくなってしまうこともある。石田さんが車椅子から降りて動くと、僕が普段できない動きが出来る。そういう身体とどう関わるか。コンテキストを超えた先にあるクリエイションが重要だなと思う」と話しました。



日程 | 2024年2月10日[土]
会場 | 東京芸術劇場 シアターイースト
※『へんしんっ!』終映後 アフタートーク実施
登壇 | 石田 智哉 (映画監督)、砂連 尾理 (振付家・ダンサー)

京都会場

上映後には、『音の行方』の野田 亮監督によるアフタートークと音遊びの会のライブも実施。音遊びの会メンバーのパフォーマンスによって、映画の上映会から、一気に、会場がライブの熱を帯び、客席も一体となって盛り上がりました。終演後には、「障害のある人の表現活動に、映像と合わせて、体感として触れられたことは大きかった」という感想も。

また、上映会3作品を通してご覧になった文化芸術関係者は「さまざまな障害のある方の創作現場について、自分の活動との比較軸を持って鑑賞することができた」「音声ガイドにオープンガイドとイヤホンガイドがあることをはじめて知った。両方が体験できたことで、アクセシビリティについての体感が深まった」とお話ししてくださる方もいらっしゃいました。



日程 | 2024年2月17日[土]
会場 | ロームシアター 京都 ノースホール
※『音の行方』終映後 アフタートーク実施
登壇 | 野田 亮 (監督)、音遊びの会

暮らす地域の劇場で、「表現と共生」を考えるということ

5地域の劇場との協働により実現した、3作品の上映とトーク会。シニアから学生、子どもまで、障害のある人もない人もさまざまな層が、それぞれの生活する地域の劇場で出会い、共に考える場が生まれました。

企画運営者座談会 「入門編」で、企画運営者として大切にしたいことは？

——「正解のない問い」を問い続ける仲間をつくる——

文化庁からの委託事業「障害当事者の劇場・文化施設での芸術鑑賞及び体験を充実させる施設職員とアーティストの育成プログラム」の一環として、実施された本事業。事務局スタッフとして、企画運営に関わった3名が入門編講座を振り返りました。



黄木多美子
制作統括



星茉莉
プロジェクトマネージャー



兵藤茉衣
企画協力

——「そもそも」を問ひかける、6回の「オンライン講座」シリーズ

黄木 オンライン講座では、各講師のみなさんが受講生に双方向的なやりとりを組み込んでくださったのがよかったです。積極的な方は、チャットなどを使って、感想や質問を投げてください、やりとりが生まれ、熱量も感じられましたね。

星 今回、6回の講座を通じて「そもそも芸術文化の価値とは?」「合理的配慮ってなに?」という根っこのお話から、具体的な創作の現場の事例まで、企画を立てていく時に必要な、具体的な視点を得られたのではないかと思います。

一方で、約100名以上のお申し込みをいただいて、さまざまな属性の方が参加されていたのですが、受講生同士の交流を促すことまではうまくできなかったかもというのは反省。

——地域の劇場関係者と一緒につくりあげた、「上映会」の枠組み

黄木 私自身、舞台芸術の制作、プロデュースに関わってきましたが、この講座の対象者である「どうやってアクセシビリティの世界に踏み出せばいいんだろう?」って思っている劇場や文化芸術の企画制作者には私自身も含まれています。

だからこそ、今回一緒に「上映会」をやってくださった劇場の皆さんと「今後も連携していきましょう」とお話しできたことは本当に良かったし、自分自身もこの事業運営を通じて、ある意味、「インクルーシブな取り組みや考えなしには事業ができない身体」になった感じがします。

星 地域の方、行政の方が集客などをお手伝いくださって。お客さんとしても、当日券で地元のシニアが来てくださったり。演劇部の高校生がやってきて「こういう世界があるのをはじめて知りま

した!」と興味を持ってきていたことも、とても嬉しかったです。

——継続していくこと、仲間を増やしていくこと

兵藤 そもそも、障害のある人と共に何かやっていくといっても、そのプロセスや想いは人それぞれ。いろんな立場、いろんな目線の人がいること自体が大切であるとも感じますね。

星 これは「正解のない問い」。「こうやっておけば大丈夫」ではなくて、きちんと声に耳を傾け、課題を丁寧に考える仕組みを検討しなければならないと思うので、まずは「様々な人の声を聞く場をつくること」を今後も意識していきたいです。

兵藤 芸術事業に関わっていて、個人的に一番面白いのは「価値観が変わる」っていうことなんですけど。その感覚って、障害のある人と話して「当たり前だと思っていたことがそうではなかった!」と気づくことにも共通するなぁとは思っています。いろんな立場の人と、面白さを共有して、共に考える状況をつくりたい。こういう事業を続けたいですね。



地域みんなで取り組むアクセシビリティ。 公共・劇場にできること、やっていくべきこと

今回、上映会に協力して下さった3箇所の劇場のご担当者の方に、
ご自身の施設でのアクセシビリティの取り組みや課題、
そして、今回の上映会にご協力いただいたご感想やお考えになられたことをお聞きました。



萩原 宏紀
いわき芸術文化交流館アリオス
企画協働課
企画制作グループチーフ



木澤 美恵子
りゅーとびあ
新潟市芸術文化会館
事業企画部 演劇企画課 課長代理



小倉 由佳子
ロームシアター京都
プログラムディレクター

——文化芸術のアクセシビリティに対して、課題に感じていることはありますか？

萩原 いわきアリオスでは2021年に「ユニバーサルデザイン検討推進委員会」というプロジェクトを立ち上げ、2022年度はパントマイム公演を開催。コミュニケーションボードやポケットークなどを準備しました。

今年度は目が見えない人や日本語を母国語としない方でも楽しめるように、お経に節がついたものを僧侶が唱える「声明」の公演や、聴覚障害がある方に向けて、字幕タブレットや補聴のサービスを提供する演劇公演を実施しています。

ただ各種サービスを利用してもらう機会がまだ少なく、一方で費用はかかってしまうという現状がありますね。その中で集客や予算確保をどうするのか、今後ユニバーサルデザインをどう常態化させていけるのかということが課題です。

木澤 りゅーとびあは音楽・舞台芸術の拠点として、コンサートホール、劇場、能楽堂を備えている複合施設で、事業が多種多様という背景があります。その中で、舞台芸術のアクセシビリティに取り組みたい思いはあるのですが、まだ試行錯誤段階で、りゅーとびあ全体では、主体となった企画を定期開催する、というところまではできていません。

年に数回劇団さんが主体となって、ツアー内全ての公演を字幕付きで行うケースがあるので、その際にご協力をしたり、今回のようにお声がけいただいた企画に参加をしたりという程度です。

小倉 ロームシアター京都でも事前に準備できるものに関して

は、できるだけポータブル字幕機や音声ガイドをつけるように努めています。それでもなかなか全ての演目に対して行うことは難しいのが実情です。

あとは暗転の時のポータブル字幕機の光漏れについても内部で話し合っています。障害のある方を優先する回を企画することも検討していますが、京都での公演はなかなかロングランとはいかず2~3公演のことも多く、どう設定するのが良いか決めかねています。

料金設定も常に持ち上がる課題ですね。現在は車椅子利用者専用の鑑賞スペースがあることに対して、他の座席を選べないため車椅子利用者の割引を適用。その他は、介助者は無料と設定していますが、他にも割引を設けるかどうかを検討中です。

——本事業の上映会に協力していただいていたかでしたか？

萩原 いわき市内ではおそらく劇場で映画を見ること自体が日常化してなくて、今回に限らず上映会の集客は厳しい傾向にあります。それでも、今回アフタートークがあった『こころの通訳者たち』の回は一番お客さんが入っていましたし、偶然にも映画関係者といわきの繋がりがあったことで盛り上がっていました。今後もゲストが来る場合は、例えば事前にワークショップや交流会など顔合わせをして地域との関係性を築いておくなど、工夫を重ねることが重要だと思います。

木澤 参加者の様子を見ると、本当に皆さん興味を持ってご覧いただいていたようで、上映会終了後は映画の感想やアクセシ

ビリティの取り組みについて非常に活発に話されていたので、深く届いたのではないかと感じています。

ただ集客は私たちも難しさを感じたところでした。当初は演劇公演などの折込チラシでご案内をしていたのですが、後になって市内の映画館に案内を持って行ったら、「行きたいけれど開催日はすでに予定が入っている」と言われてしまったんです。演劇鑑賞者だけでなく、参加者層をもっと広く想定して、早く案内すればよかったと反省しました。

小倉 私自身公立文化施設に勤めているからこそ、アクセシビリティを学ぶことへの職場の理解やサポートも大切だと思っています。例えばですが講座参加が出張扱いになる、研修として業務時間内に含まれるなどといった仕組みになると、より学びやすくなり業界全体の変化にもつながるのではないのでしょうか。そしてロームシアター京都は企画実践編の企画発表会の会場でもあったのですが、職員も積極的に参加して、受講生の方と意見交換ができればよかったと思います。

——文化芸術のアクセシビリティで今後取り組まれていきたいことはありますか？

萩原 今後もユニバーサルデザインに取り組む事業を継続していくにあたって、企画やアイデアは常に探しているのですが、今回のように提案をしていただけるならとてもありがたいです。

あとは障害のある方や外国人の方、海外にルーツのある方などにも参加していただける演劇の創作事業にも取り組んでみたいと思っています。これまで創作事業において、年齢以外で対

象者を限定することはありませんでしたが、障害のある方や外国人の方が、「自分も対象になる」と思われていないように感じています。多様な人たちと一緒に演劇を創作できる事業をやりたいという思いはずっとあるので、なんとか形にしていきたいですね。

木澤 まだ具体的なビジョンは未定ですが、りゅーとびあでは今後も舞台芸術のアクセシビリティに関する事業を毎年行っていきたいと思っています。予算の確保が大きな課題の中、今回のような形で協力をさせてもらったり、他団体とともに開催するといった選択肢があるというのは、アクセシビリティに取り組むハードルがだいぶ下がるので、とてもありがたいです。実践を通してアクセシビリティを学び、地域の人にも知っていただき、少しずつ取り組んでいくというのが現状できることなので、着実に継続していきたいと思っています。

小倉 最近気になっているのは、演劇公演では聞こえない人に対して文字支援の対応をしてきた一方で、音楽やダンス公演の場合にどうするのかということです。以前コンテンポラリーダンスのような、説明が難しいパフォーマンスを音声言語で伝えているのを見たことがあるんですけど、解釈の部分が大きくて作品と別物になるのではないかと感じました。作品形態、障害特性、観劇サポートの方法が、マッチする方法でなければあまりいい経験にならないこともあるのかと考えたりしています。

他には、障害がある人に対してサポートを提供するだけでなく、講師側に回っていただいたり、お互いに学び合えるようなプログラム制作にも今後は取り組んでいきたいです。

